

地域包括ケア時代の 薬局・薬剤師の役割



ファルメディコ株式会社
大阪大学大学院医学系研究科
統合医療学寄附講座特任准教授
医師・医学博士 狭間 研至

第28回 薬を飲んだ後こそ薬剤師の専門性が生きる

“薬の専門家”としての役割 モノと情報だけでは果たし得ない時代に

薬剤師とは“薬の専門家”だと思います。しかし、多くの薬剤師が行っている、医師の処方箋応需から始まって、必要に応じて疑義照会を行った後、正確迅速に調剤し、分かりやすい服薬指導とともに薬を交付、一連の行為を遅滞なく薬歴に記載するという作業の中で、どこに“薬の専門家”としてのプレゼンスを発揮しているかという、少々悩ましくなっているのではないかと思います。

一昔前は、薬を正しく調合したり、準備したりすることには技術や訓練が必要でした。多くの種類の薬について、必要な情報を理解し患者さんに正しく説明するには、大変な努力や知識が必要だったので、“薬の専門家”としての役割は一部分あったのだと思います。

しかし、今は、全自動を特徴にした調剤機器が多数販売されています。機械的に薬を取り揃えたり、分包することであれば、まさに機械でできるようになってきたといえるでしょう。また、薬の基本情報は、インターネットの発達により、どこでも、誰でも、瞬時に手に入れることが可能になってきたのです。

薬に関する「モノ」と「情報」について専門性を打ち立てようと思っても、なかなか難しい時代になったのではないのでしょうか。

翻って、薬剤師になるためには、基本的に高校を卒業後、薬学部に進学する必要があります。薬剤師は、薬学部で学ぶ内容に基づいて専門性を構築し、日常業務で発揮するはずですが、医師である私からみて、それは薬理学・薬物動態学・製剤学なのではないかと思います。しかし、多くの薬剤師にとって、臨床現場ではこれらの知識より、広く医療の知識やコミュニケーション能力の方が大切に見えるのかも知れません。

とはいえ、薬剤師に限らず他の医療従事者も、チーム医療の中で専門性を発揮することは、なかなか難し

いものです。やはり、薬剤師は他の医療従事者がそこまで深くは学ばない、薬学的な知識を活用してこそ、専門性を発揮できるのではないかと思います。

服用後の患者のフォローこそ 薬学的な知識を発揮できる場

そんなとき、本連載の前回でも述べたように、「薬を飲んだ後までフォローする」ことが必要になります。というのも、薬理学というのは、この薬がなぜ効くのかということとを解き明かす学問ですし、薬物動態学というのは、薬剤が体内でどのように「吸収・分布・代謝・排泄」されるのかを時間軸とともに理解するために必要な学問です。そして、製剤学というのは、例えば「胃で溶けずに腸で溶けるように、このコーティングを施しました」といったことを考え実現する学問だと思うのです。そして、これらは、いずれも薬が身体に入った後の話なのです。

そして、当たり前ですが、薬は飲んだ後が勝負です。患者さんにとっては、NSAIDsが飲みたいのではなく、頭痛を止めたいわけです。だとすると、今飲むと、いつ頃効果があるのかとか、次はいつ頃飲んでよいのかといったことを、医師や看護師と異なる観点で、薬剤師は考え、指導することができるのです。薬が効くメカニズムを頭に入れながら、目の前の患者さんの症状を確認し、効果が出ていなかったり、出過ぎていたり、はたまた副作用が疑われるような場合には、薬学的知見に基づいて、医師や看護師、患者さんやその家族に指導していけば、必ず、薬剤師の専門性は屹立していくはずですよ。

もし、あなたが薬剤師としての専門性に悩んでいるとしたら、患者さんが薬を飲んだ後をフォローし、薬学的に読み解き、その見立てを処方医や患者さんにフィードバックしてあげてください。自分でも驚くぐらいに、その悩みは解消されていくと思いますよ！